

住井すゑ『橋のない川』成立をめぐる覚書

——草稿に基づき——

安達原 達 晴

はじめに

長編『橋のない川』で知られる作家住井すゑと、その夫で農文学運動の活動家でもあった作家犬田卯の住居が茨城県牛久市城中町にいまも残っており、この旧邸宅内の文学関係資料・遺品等の調査を二〇一八年度より東海大学文学部日本文学科が行っている^①。

『橋のない川』は、奈良の被差別部落出身者、畑中家の兄誠太郎と弟孝二の生い立ちから成長をたどりつつ、解放を求める人々が団結し、実在した運動団体「全国水平社」を組織していく姿などを描いている。第一部は部落問題研究所の機関誌『部落』に一九五九年（昭和三四）から連載された後、一九六一年に新潮社から刊行。第二部以降はすべて新潮社からの書下ろしとなり、一九七三年に第六部までが完結、その後一九九二年（平成四）に第七部が発表されている。

牛久市の住井・犬田旧邸で行われた調査では、原稿・草稿^②を含

めこの『橋のない川』に関連する資料が大量に見えられた。『橋のない川』関連資料、それ以外の住井・犬田関連資料については、受託調査研究の報告書および拙稿^{③④}に詳しいため、本稿での言及は必要最低限にとどめる。

住井が戦時に体制側の作品を発表していたこともあり、『橋のない川』に対する批判は少なからず存在する。近年では加賀谷真澄が綿密な検討のもと、同作は「大正当時の史実に沿って描かれた作品ではなく、一九五〇年代から六〇年代にかけての部落運動の盛り上がり」と、在日朝鮮人問題によって社会的な意識が高まった時期に、差別に苦しむ人々の連帯が理想化されて描かれた物語である^⑤と指摘している。『橋のない川』が虚構（フィクション）であることの意味は、今後も問われねばならないだろう。

本稿では、物語の内容に対する価値判断に踏み込むことはできない限り避け、本作の草稿からみえてくる事柄を報告してみたい。全体の概要としては本作の成立に関する考察となるが、資料自体の意味や魅力が少しでも伝わればと思う。

一章・節の区切りについて

暫定でも一千枚以上にのぼる『橋のない川』草稿^⑥には、作中の同一の場面や文脈を原稿用紙をあらためて何度も繰り返し書いているものが多く含まれている。その多くは微細なレベルながら、物語展開や人物像などにまつわる作品表現が目まぐるしく変転し、徐々に生成に向かつていく動態的なさまをみせる。それらの草稿中、完成作品とは異なる形で章あるいは節が区切られているものがいくつかある。例えば、第六部「花蓼」の章、完成作品では、

正太は新聞様の紙片をあわただしくふところから抜き出して、

「号外や。」

「号外、出よったさかい、買うて走って帰ってん。」

熊夫が説明を加えた。

「お、号外か。そら、ええ土産、買うてきてくれたのう。」

言いながら国八も土間越しに作業場に眼をやった。

号外は既に貞夫の手に渡っていた。

三

(三二—三三頁)

となっている。「三」の後は「貞夫」が読み上げる号外の書き出し部分の引用となる。次に、右記の箇所と類似の場面が描かれているとみなせる草稿を挙げる。

三

「お前はんら、約束どおりええ土産買うてきてくれてありがとさん。」

新聞半頁大の号外を、あらまし貞夫が読み終えたところで國八が言った。

源吉も、

「せっかくの祭礼^{まつり}そこのけ(よそ)に、号外買うて走って帰るとは

号外を読む主体が「貞夫」から「國八」に変わっているが、ほぼ同様の場面を描いたと思われる草稿をもう一つ掲げる。

三

「お前はんら、ええ土産、買うてきてくれてありがとさん。」

新聞半頁大の「号外」を隈なく読みつくした國八は、

以上の二つはそれぞれ、四百字詰原稿用紙一枚に書かれた全文である。「三」の前の叙述があるとみなせる草稿の存在は現段階では未確認だが、完成作品とは節の区切り方が異なっているらしいことが分かる。もう一例、同じく第六部「袴」の章、「四」の最後の場面をみでみる。

「せやとも。それに熊夫ちゃんのお父うちゃんはどこに居てたかきつと元気にしたはるがナ。そうかて、熊夫ちゃんのお父うちゃんは、いつも背中^{うしろ}の金時と一緒にもんナ。」

「あはは、あはは、あはは、あはは、あはは、あはは。」

大声に熊夫は笑った。笑いながら熊夫はあふれる涙を手の甲で拭いた。

否応なしに、お父うちゃんといっしょに、寒い北海道の空

ンゴクにつながれた金時。

否応なしに、お父うちゃんといっしよに、炭坑のまつ暗闇にほうり込まれた金時。

(中略)

それでも熊夫はなお涙があふれた。熊夫にはおかしくも哀しく、又、哀しくもおかしい父と金時の交りだった。

さて、熊夫待望の袴は、二月五日、旧正月の休みに仕立て直され、その日のうちに熊夫の手に渡った。黒地にうぐいす茶の小倉縞で、紐の井筒結びは、まるで折紙のようにぴんとしていた。

熊夫はその日まで、毎晩、枕頭に飾っておくことに決めた。

(四四三頁)

中略の部分には「熊夫」が空想する、父と金時とが交わす会話などがある。次に類似がみられる草稿を掲げる。

いとも思えた。孝二は殊更に胸を張って、

「熊夫ちゃんのお父うちゃんは、どこに居たはつても大元氣や。そうかて、いつかて金時と一緒にもんなア。」

「あはは……。」

熊夫は笑った。笑いながら、熊夫はあふれ出る涙を拭いた。父と共にカンゴクにつながれた金時。

父と共に炭坑の暗闇に投げ込まれた金時。

熊夫にはおかしくも悲しく、又、悲しくもおかしいことの成り行きだった。

五

四百字詰原稿用紙一枚の全文である。前掲の完成作品引用冒頭の言葉も、「孝二」が「熊夫」にかけたものである。「五」の後の叙述に相当する草稿は確認できていない。完成作品は「四」をもって「袴」の章が終わるので、前掲引用部は章の最後でもある。草稿では、さらに「五」と、節の番号が設定されており、何らかの叙述が継続される可能性がうかがえる。完成作品の「さて、熊夫待望の袴は、」以下その他が、「五」以降に続いたかもしれない。

さらに、完成作品と草稿との対比で目立ってその結構が異なる可能性を推測できる箇所がある。第六部「鵲」の章である。まず、完成作品の冒頭を章題を含めて引用する。

鵲

一

冬至が過ぎた。

一日、日脚がのびる。

しかし、寒さの本番はこれからだ。それを語るかに金剛風がヒューン、ヒューンと呼吸笛するどく盆地を東に吹き抜ける……。きょう、十二月二十七日。孝二の母実家、井野の家では惣七おじやんの三回忌だった。

(二六六頁)

次は草稿、四百字詰原稿用紙一枚の全文である。

三 冬董

一

ヒューン……

ヒュルル……ン

金剛嵐が連日金切り声をあげて盆地を突つ走る。往還はもとより、日ごろは適度に水分を含んで、しっとりとした肌をほこる耕土も、金剛嵐がはじまるや、忽ち岩のように白々と続いて、まこと、凛冽の一語に盡きる大和盆地の冬である。

そして今日——十二月二十七日もその金剛嵐が吹き荒れている。

岩造小父さんのあのハナシも、まるきりの

「金剛嵐」の表現、また「十二月二十七日」という日付の一致から、両者が類似の場面を描いていることは容易に推測できる。右の草稿の他に「嘘やなさそうやなア。」で始まる、明らかに連続していると思われる草稿がさらに一枚あり、「孝二」が自転車漕ぎながら「岩造小父さんのあのハナシ」を回想するさまが描かれている。完成作品には「岩造小父さん」の話しこそ登場しないものの、「孝二」が「井野の家」へ自転車に向かっており、ほぼ同じ場面であるとみてよいだろう。重要なのは完成作品で「鵲」の章題に相当する箇所、草稿では「三 冬董」とある点である。章の番号らしき「三」には後述で触れるとして、「冬董」が何を指すかは、物語をたどれば明らかである。

「鵲」の章、「一」には本作の主人公（の一人）畑中孝二が意中の、杉本まちえの姿を道端の董に重ねる印象的な場面がある。「冬董」または「寒董」は俳句における冬の季語で、花期を春とする董が暖冬に日当たりのよい庭園や山懐の道端に花を咲かせる

ときの呼称とされる。⁹⁾ 孝二は自身が見つけた董を「寒董」だとして、その「濃紫」にまちえが常用する袴の色を想起する。二人は同じ村に住むが、被差別部落である小森の孝二と、そうではない島名のまちえとの間には大きな隔たりが存在する。この場面も、「井野」への途次に「寒董」を見出し、まちえのいる島名へ走る選択が孝二の頭をよぎっている。¹⁰⁾

孝二とまちえの関係は『橋のない川』における通奏低音のごとく潜在しており、ときに物語の表層にあらわれてくる。そのような意味でも、「冬董」の章題とともに上記の場面を中心的に読者へより印象づける構想があつた可能性を、草稿からはみてとれるだろう。言い過ぎを承知でいえば、完成作品におけるこの董の件を含む場面を独立した章として仕立てようという意図も、住井には当初あつたのかも知れない。完成作品では削除されている、孝二が回想する「岩造小父さんのあのハナシ」——「金剛嵐」に代表される「大和」一帯の寒気などにまつわる——が草稿には残っている点からも、当該場面を詳細に描く方向性があつたと考ええることは可能ではないか。

「鵲」の章は全「四」節で、前述の董の件を含む「一」以外は、「井野の家」、つまり「孝二の母実家」である峯村家が舞台となり、物語の内容から章題の由来は明らかとなる。まず孝二と、畑中兄弟の従兄西沢和一の妹春枝とが交わす会話である。ここでは、前章「落穂」で和一身が語つた「いわゆる一般農村」である松川村出身の女性、飯坂でいとこの交際が話題に上る。春枝は、「裁縫友達」で手紙も交わす仲であるていと親睦を深められた

きっかけを孝二に伝える。かつて孝二も学んだ松川の高等小学校に講堂が建設された記念として同窓会が開かれ、そこで小森部落民の先達ともいえる村上秀昭とともに孝二が行った演説が、てい強い感銘を与えたのだと言う。ていと春枝、さらにはていと和一の関係の遠因となった村上と孝二について、傍らで二人の会話を聞いていた、峯村家の娘で孝二の従妹である七重が「七夕さまの鵲みたい」と漏らす。

周知の通り、陰暦七月七日の夜に牽牛と織女の二星が逢う際、鵲が翼を並べ天の川に橋を渡すとされており、七重は結果的に仲立ちとなった村上と孝二を「鵲」に喩えたのである。七重の喩えは孝二の受け答え、七重自身のさらなる言葉も加わって、和一の居る大崎とていの松川とを隔てる「天の川より千倍も万倍も広うて深い川」、またそこには「危い橋さえも架かつてない」という、差別の現実が二人の關係に深刻な影を落としていることを指摘する春枝の言葉にまで波及していく。

「鵲」の章には七重についての叙述、また孝二と彼女とのやり取りも多くみられる。七重は孝二の兄誠太郎の同級生で畑中兄弟と親交を続ける渡辺（松崎）豊太を慕うが、被差別部落出身者である長島要太郎との結婚を決める。決心に至った胸のうちを、彼女は孝二に打ち明けるのである。章の最後、峯村家を辞して小森に戻る途中、霜で覆われた「葛城川の大橋」をみて、孝二は大夫家持の「かささぎの渡せる橋に／おく霜の白きを見れば／夜ぞふけにける」（改行を示す）^①は稿者による（以下同）、それ以外は原文のまま）を浮かべ、古の恋と「貴賤の差別」に想いを巡ら

す。（かささぎの橋）が鵲の、天の川に架ける橋であることはいうまでもない。この場面では本章「二」「孝二自身、曾て島名に向いて葛城川をこえたため、しなくては、将来とてまちえの住む島名を目ざして大橋を渡るあてがあるとは言切れない。」といった叙述との共鳴も考えられるだろう。

章全体を見渡したとき孝二とまちえ、和一とてい、七重と豊太それぞれの関係やそれらを語る表現、章末の孝二による述懐などを踏まえると章題の「鵲」はその背後に「橋」「川」をも想起させ、男女の逢瀬（出会い）、またその非常な困難にも通じる表象といえる。既に前章で、和一とていの関係については孝二の母ふでの「大崎と松川では、いうたら、渡る橋もない大けな川が、間にこうこう流れてるみたいなんやでなア」という言があり、章末では孝二が夢の中で「ベーリング海峡」越しに杉本まちえへ呼びかける。つまり、特に前章「落穂」から本章「鵲」にかけて、まさに本作の題目「橋のない川」と直結する叙述や表現が頻出するのである。

以上から、完成作品においては孝二とまちえの關係のみを特化して浮かび上がらせるような「冬菫」より、それ以外の和一とてい、七重と豊太の關係をも包含してかといずれもが直面している差別の過酷な現実という、本作テーマの一つそのものを覆い得る章題として「鵲」が妥当であるといえるだろう。住井が執筆する時点で、「鵲」の章の構想、構成がどの程度明確だったのかは正確には不明であるが、前述した前章末の孝二の夢中に登場する「紫袴の杉本まちえ」と併せるならばいっそう、本章「一」の菫

の場面を強く意識していただろうことが「冬董」の題目からうかがえる。そして実際に執筆を進め、完成作品の状態へと近づいていくなかで章のモチーフが徐々に明確化し、章題の変更にも至ったのではないだろうか。

換言すれば、これは当然だが、もし初めから完成作品のごとく本章の内容が確定していたとしたら、おそらく「冬董」の題目は付されてはいなかっただろうということである。草稿にあるように「三 冬董」と書き始めたとき、孝二が道端に董を発見してまぢえを想う展開は住井の構想として鮮明にあつた可能性は高いが、その先の見通しについてはそこまで明確ではなかったかもしれない。あらかじめ設計していた内容を書き上げた後に章題のみ付け替えたとするより、執筆の進行に伴い当初の意図が上書きされた結果、章全体の内容によりふさわしい題目を冠したと考える方が自然に思える。井野の峯村家が舞台であるという漠然とした方向性はあつたとしても、住井は執筆を続けるなかで構想、構成を柔軟に変化させていったと推測する。

ところで前述の通り、残された膨大な草稿群から住井が同様の場面について原稿用紙を何度もあらためて書き直していた様子が見てとれる。実は当該場面に関する草稿も多数、存在している。まず「三 冬董 一」以下で始まる、一章分の書き出しと思われる草稿が現時点で、前掲のものも含めて四枚、確認できている。いずれも類似の書き出しで「岩造小父さんのあのハナシ」への言及がみられ、「1」のノンブルが振られている。また、これら「三 冬董」冒頭の草稿に接続する、孝二が董を見つける場面に

関わると思われる草稿が、現時点で六二枚である。

もちろん、これら草稿の在りようから作者住井の当該場面に對する力の傾注の度合いを推し量ることも可能だが、やはり強調したいのは住井の執筆スタイルである。書きつつ構想や構成を柔軟に変更していくと前述したが、それ以上に、想があらわれる端から瞬時に原稿用紙へ書き連ねていく作業を繰り返し、執筆と同時に並行で物語の生成と更新が重ねられるという、驚くべき可変性を草稿群から感じるのである。とにかく、少なくとも『橋のない川』執筆において、住井の作品についての構想や構成意識はある程度可変的であつたのではないか、という点を踏まえて本稿を次に進めたい。

二 仮説

草稿をめぐり、さらに二つほど指摘しておきたい。まず一つ目を述べる前に、住井すゑがその紙背を日記に再利用した草稿群について触れる必要がある。暫定一千枚以上の『橋のない川』草稿のうち、四五〇枚ほどがこの紙背が日記に利用された草稿になる。これらは日記として年月のまとまりごと十四冊に分かれており、調査研究作業の便宜上、各冊を「1」から「14」までナンバリングした¹⁵⁾。「日記1」に相当するもの以外は、B4判原稿用紙四〇〇字詰半裁である。草稿紙背に記された住井すゑによる日記は、一九七二年（昭和四七）一月から翌一九七三年二月までのものであり、これは『橋のない川』第六部の執筆・刊行時期と重なる¹⁶⁾。実際、「日記1」から「日記14」までの草稿の大半が第六

部の内容に該当する。

右記の草稿は、裏面の日記と照合してそれが書かれた時期の下限を特定できる。一例を挙げる。表題に「一月 二月」とのみ記された「日記1」は、一月一日から二月二十九日まで続き、その内容からも一九七二年のものと分かる。一方、「日記1」五一枚の草稿面はすべて第六部「花蓼」の章の内容であり、少なくとも一九七二年一月一日には当該章は書き始められていたと判断できるのである。ここで、別稿にて稿者は、「花蓼」は第六部最初の章「絹雲」に次ぐため、この頃には「絹雲」も執筆されていた可能性が考えられると述べた。¹⁷ということは逆も然りで、「絹雲」は未だ執筆されていなかった可能性も、同じく考えられねばならないだろう。

本作第六部の章立ては、「絹雲」「花蓼」「落穂」「鵲」「櫛風沐雨」「袴」「春寒く」「生々存々」の順である。これに従えば、第六部は「絹雲」の章から書き始められたことになる。しかしながら、実は「絹雲」に相当する部分の執筆は一番目ではなく、「花蓼」より後だったのではないか、という推測も決して無視できないのである。

先ほど、その執筆の過程において『橋のない川』の結構はある程度可変的であり、厩大な推敲・書き直し作業のなかで章や節などの区切り（分節）も随時移動していたのではないかという点について述べた。この前提を踏まえると、ある仮説が生まれる。それは例えば本作が、完成作品の章立ての順序通りに執筆されたとは必ずしも限らないのではないか、ということである。草稿か

ら垣間見える章・節を単位とした本作の構成の可変性は、こうした仮説にも可能性を与えるものといえるだろう。

表題が「三月」とある「日記4」¹⁸二二枚の草稿面はすべて「絹雲」、日記面は一日から三十一日まで記述がある。一九七三年の日記に三月分の記載があるため、おそらく一九七二年三月の日記とみてよい。もちろん、「絹雲」は章立て通り「花蓼」より先に書かれていたものの何らかの事情でその草稿の紙背利用が「花蓼」より遅れた、ということは考えられる。ただし、同じく一九七二年の記述とみられる表題「四月」の「日記5」は不特定のものも混じりつつ「花蓼」の紙背利用が目立ち、それ以降、日記内容の時系列に沿っておおよそ「落穂」「鵲」「櫛風沐雨」「袴」の順で紙背利用が続いている点も加えて述べておく。

さて、二つ目の指摘は一つ目とも関わる。前掲の「三 冬菫一」以下の草稿である。『橋のない川』完成作品ではすべての章が標題のみで番号はないが、草稿の「三」はやはり章番号と捉えるのが妥当だろう。日記に紙背利用されたものの以外の草稿群に、「1」のノンブルが付され「七 春寒」とはば標題のみが記された一枚がある。他におそらく書き出しらしき「二／眞綿」の記載があり、これは第六部「春寒く」の章「二」一行目、「引きのばした真綿のような雲片。」と対応する。「春寒く」は、完成作品では七番目の章にあたり、これも草稿「七」の番号と合致する。一方、草稿「冬菫」の章で描かれていた孝二と道端の菫の場面を含む完成作品「鵲」は、四番目の章に位置する。

草稿の番号「三」とずれるわけだが、これについても複数の可

可能性が考えられるだろう。やはり「絹雲」は当初書かれず、「花蓼」が一番目の、「落穂」がそれに次ぐ章としてあったのではないか、という可能性（尤も欠落の可能性は「絹雲」にだけあるのではなく、「鵲」に先行する三つの章いずれにもある）。あるいは抑々、草稿「冬蕁」の章で描かれるはずであった内容と完成作品「鵲」の章で現に描かれた内容とが、孝二と蕁の場面という共通項はあるものの大きく異なっていた可能性も完全には否定できない以上、本作第六部完成作品の章立て自体があらかじめ予定された、確定的なものではなかったのではという点も指摘しておきたい。

これらの議論を生産的に進めるためには草稿自体の調査研究とともに、本稿「一」でのような物語内容の検討も当然、必要となるだろう。今回は紙幅等の余裕がなく、別稿に譲ることとする。

おわりに

本稿では住井すゑ『橋のない川』草稿の様態を報告しつつ、そこからうかがえる作者住井の執筆状況および、作品が完成稿に向かう生成過程のごく一端について述べてみた。この生成過程の究明は牛久市所蔵資料に限らず、今回使用した作品集以外の住井の本文や日本近代文学館所蔵の住井関連資料なども併せて行っていくべきと考えるが、まずは住井における本作構想、構成の可変性を確認した次第である。

千金楽健は『橋のない川』に〈立志小説〉的な側面を認め、かつ作品（物語）制作上の観点から〈立志小説〉構造の利点・効果

を四つほど挙げている。²⁰ そのうち「〔定型〕を利用できる」こと、つまり「一定のラインに従いながら事件、状況を時系列的に加えられる」、「主軸が定まっているため、枝葉の部分の度合いをコントロールできる」点、また「〔終わり〕を設定しなくても良い」こと、つまり「根本的には解決不能な現実問題を話題にし、「そのまま」にできる」、「続編を容易に接続できる」点は、本稿で述べた本作草稿からみえる構想、構成の可変性という話題と深く結びついているのではないだろうか。

われわれが一般に目にするテキスト（本文）は、必ずしも最初からそのように在ったのではなく、またそのような形態を迷いなく目指して成っていったわけではないという自明の事柄が本作の草稿からあらためて分かる。今後は草稿の調査研究で得た知見が、よりいっそう具体的な『橋のない川』の理解へと活かせるようになることを望む。

註

（１）牛久市教育委員会より委託された受託研究「牛久市の文学およびその関連資料についての調査研究（旧住井すゑ邸所蔵資料）」。東海大学文学部日本文学科の伊藤一郎（研究代表者）、安達原達晴、千金楽健、早乙女牧人が行っている。

（２）本稿において草稿とは、創作メモなどとは異なり、作品本文の推敲の痕跡がみられるものとする。原稿・草稿の定義については、後掲注の調査報告書および拙稿を参照。

（３）「牛久市の文学およびその関連資料についての調査研究 旧

住井すゑ邸所蔵資料調査報告書」、二〇一九年（平成三二）三月、東海大学文学部日本文学科編。

- (4) 安達原達晴「住井すゑ『橋のない川』草稿に関する報告―現状とその可能性―」、『近代文学資料研究』第三号、二〇二〇年三月刊行予定。

- (5) 加賀谷真澄「『橋のない川』における内地在住朝鮮半島出身者―戦後の再構築としての被差別部落民との共闘関係」、『文学研究論集』、二〇〇九年二月。

- (6) 調査研究は二〇一九年度現在も継続中のため、本作草稿の数量は増す可能性がある。

- (7) 前掲注3および注4。

- (8) 以下、前掲注の調査報告書および拙稿にならない、このように呼ぶ。本稿における完成作品の引用は『住井すゑ作品集』第六卷（一九九九年五月、新潮社）による。引用に際しては頁数を付した。

- (9) 『新版・俳句歳時記（第四版）』、二〇二二年六月、雄山閣。

- (10) ここで孝二は、思い切れない自分を諫める「岩造小父さん」の言葉を空想している。

- (11) 『日本国語大辞典 第二版』第三卷（二〇〇一年三月（第一刷）、小学館）、「鵲」の項。

- (12) 「けど、せっかくの鵲も、たったの二羽ではあきまへんワ。そうかて七夕さんの晩、鵲が翼を組んで天の川の橋になり、牽牛さんと織女さんをうまいこと渡らせて上げられたのは、何千羽、何万羽で、ようけ仲間が居てたからだっしょろ？」

（三七五頁）。

- (13) ただし、本作第一部冒頭でふでのみた夢として、ふでと、日露戦争で戦死した彼女の夫・畑中進吉が文字通り「橋のない川」で隔てられたままの様子が描かれており、「橋のない川」の表象が添い遂げられない男女の関係を示唆するという点では第六部「鵲」の章で触れられる男女たちと同様だが、ふでと進吉とともに被差別部落出身者である点は異なる。

- (14) 「橋のない川」は一九五九年（昭和三四）から一九六四年にかけて第一部から第四部までが完結、さらに六年後の一九七〇年一月に第五部、また一九七三年一月に第六部、一九九二年（平成四）九月に第七部が発表される。第四部までが物語として一つの区切りであり、第五部以降は新たな構想のもとに書き継がれていったと考えられる。こうした事情を踏まえると、住井の構成意識の変性は第五部以降によりみられる可能性はあるだろう（千金楽健の指摘による）。現段階で見られている本作草稿のかなり多くが第五部、第六部、第七部に相当しているという点も、この可能性と何らかの関係があるかもしれない。

- (15) 稿者は「日記1」から「日記7」の草稿の調査を担当。なお、本文で述べる住井すゑの日記および紙背を日記利用した草稿の詳細については、前掲注3および注4を参照。

- (16) 「橋のない川」第六部は、一九七三年一月一五日に刊行。

- (17) 前掲注4。

- (18) 「日記2」の表題は「1973.1」・「日記e」は「1973.2」。ナン

バリングは日記の内容を確認する前にあくまで作業の便宜上、施したものであり、内容の時系列とは異なっている。

(19) 正確な情報(データ)については、別稿を期したい。

(20) 以下の引用も含め千金楽健、国文学言語と文芸の会二〇一九年度大会発表「住井すゑ『橋のない川』——構造と、立身出世」(二〇一九年二月八日、明治大学駿河台キャンパス)発表資料による。同資料によれば〈立志小説〉とは、佐藤紅緑『あま玉杯に花うけて』が一九二七年(昭和二)から『少年倶楽部』で連載されるにあたって冠せられた語であり、立身出世を主軸とする小説である。千金楽は『あま玉杯に花うけて』と『橋のない川』とを物語内容において構造的に対照し、後者の〈立志小説〉的な側面を考察している。

〔付記〕

※草稿以外の、住井すゑ『橋のない川』本文は『住井すゑ作品集』第六卷(一九九九年五月、新潮社)によった。完成作品についてはルビを適宜省略、傍点はそのままとし、草稿についてはルビ、傍点ともにそのままとした。また、誌面の制約上、完成作品本文、草稿本文における形式(行間等)を引用にあたって変更した。

※本稿は、牛久市教育委員会より委託された受託研究「牛久市の文学およびその関連資料についての調査研究(旧住井すゑ邸所蔵資料)」による研究成果であり、同資料がどのような文学的・歴史的価値を有するかの研究の一環である。本研究のためにご協力く

ださっている牛久市および同教育委員会の皆様に感謝申し上げます。

※本年度をもって伊藤一郎先生がご退職になる。研究、教育の両面において先生から賜ったご恩は言葉に尽くせない。幸い、先生とは前年度より牛久市の調査研究で一緒に働く機会を得た。このたび『湘南文学』伊藤一郎先生退職記念号が刊行されるにあたり、研究成果のごく一端を明らかにし、ささやかながら、先生のご教導への感謝の意としたい。

(あだちばら・たつはる 本学特任講師)